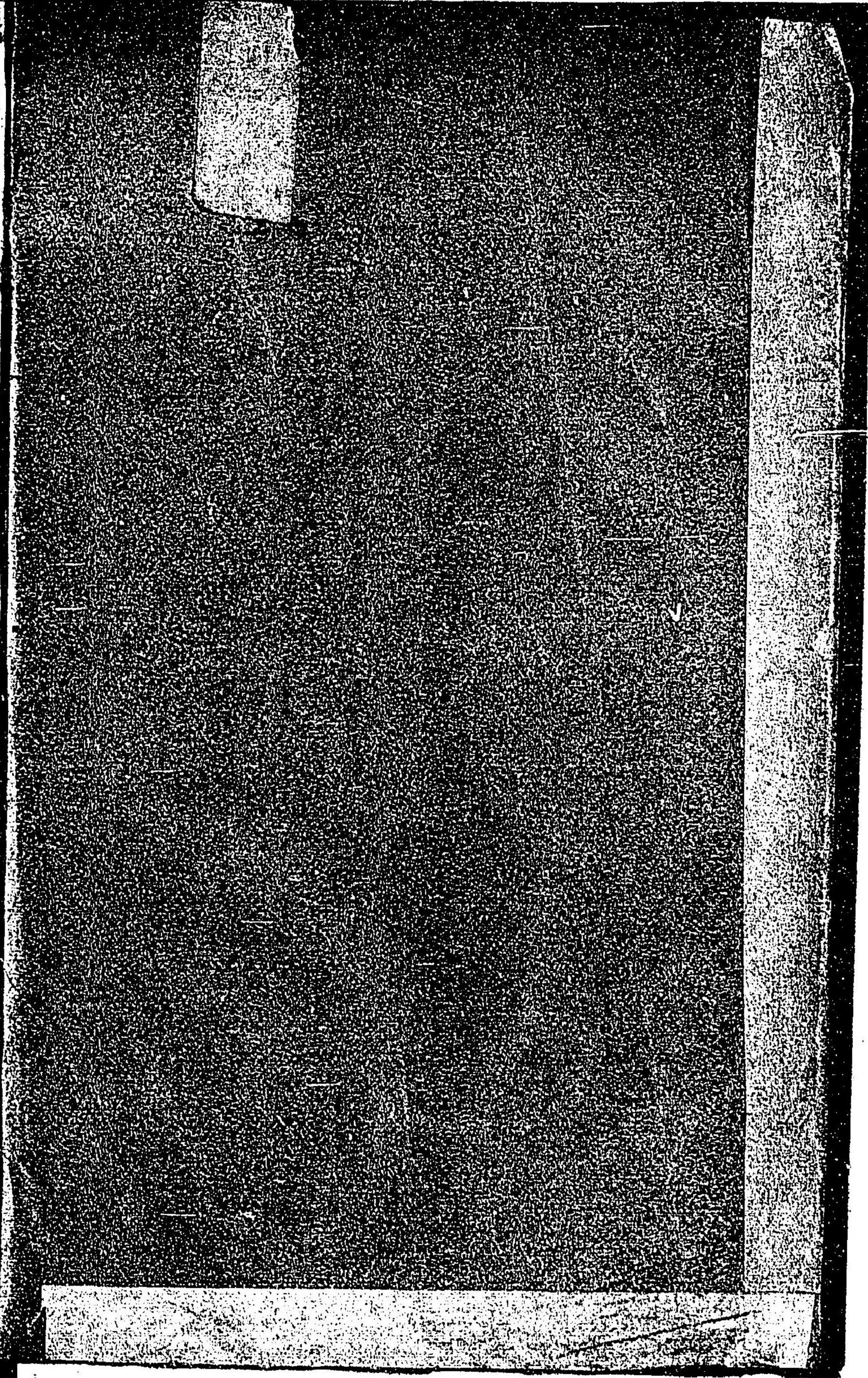


52
30

高田 畊安 著

口腔聽診法

明治四十二年十二月刊行



謹啓

時日向身候々此年春

少傷迄なほなま年あ時は春は春は春は

能職一と廿五年と

從上入の情の海と書

連と一と書と示

速に之を以て其の舊を以て示
す。是の如くは、其の存

貴の如く、其の是の方法が、

其の如く、其の價値の如く、

信下貴下。名を以て、是の

奉祠と洗むると同時に、

疾しめ、自ら、新法を試むるの

悔おすも、次を以て、

其の貴の如く、返上、

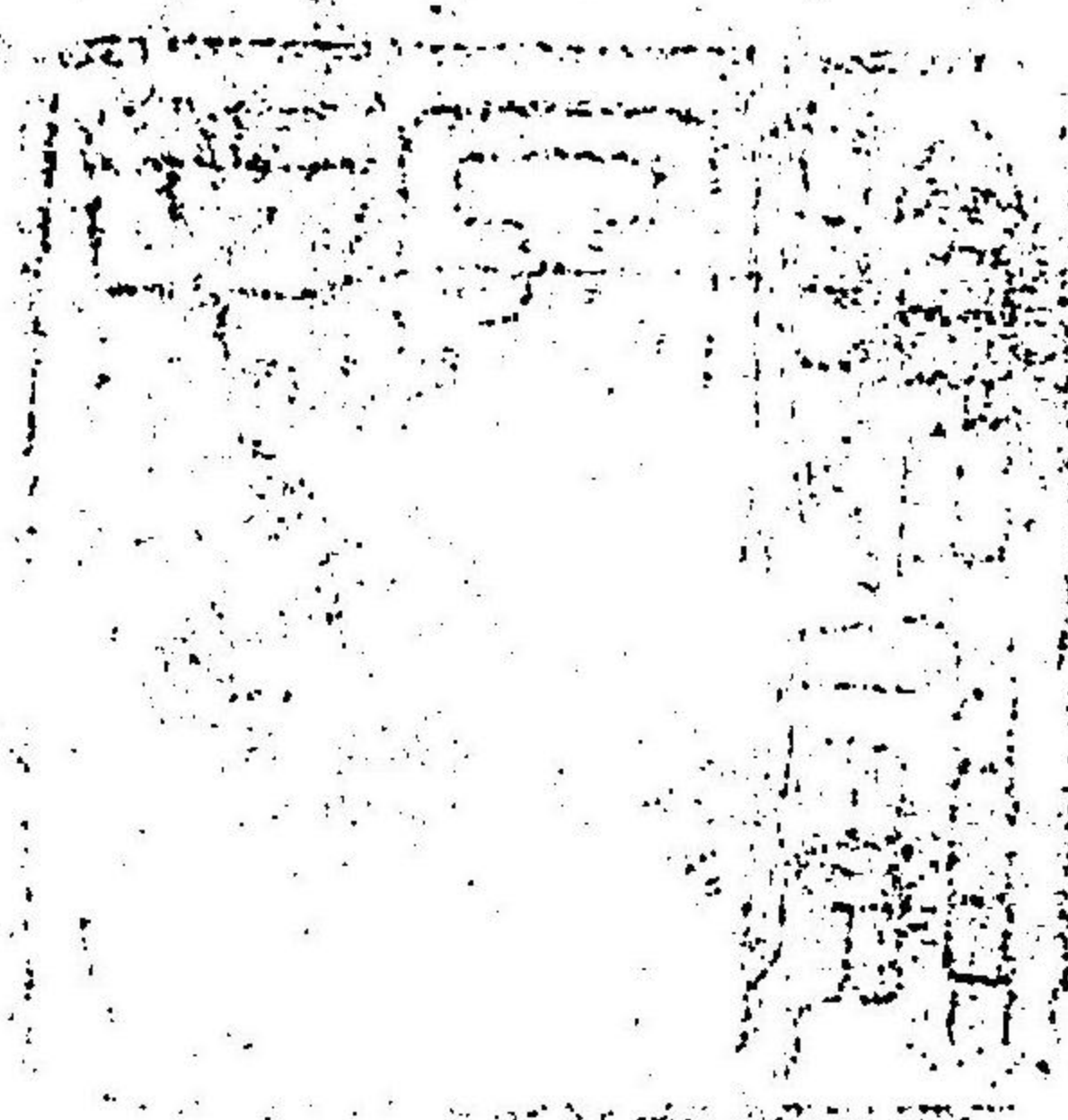
津表、其の如く、其の

其の如く、其の如く、

其の如く、其の如く、

其の如く、其の如く、

52-30



序

本書ハ明治四十年東京帝國大學醫科大學教授大澤謙二先生在職四分
 百年ノ祝賀論文トシテ起草シ壹千部ヲ發刊シテ同先生初メ同業者
 間ニ分配シタル所ノ者ナリ爾來予ハ日常其所載ノ口腔聽診法ヲ實行
 シテ今日ニ至ル而シテ其肺結核早期診斷上極メテ緊要ノ方法ナルヲ
 確證セリ然レドモ本法ハ未タ弘ク世間ニ行ハル、ニ至ラス因テ茲ニ之
 ヲ再版シ以テ其普及ヲ圖ラントス

抑本書ハ初版ニ比シ著差ナシト雖モ咽喉水泡音ハ其後ニ發見シタル
 所ナルガ故ニ之ヲ追加シタリ

明治四十二年十二月

東京ニ於テ 著 者 識

明治
 43 1 18
 内交

著者畧傳

著者ハ文久元年丹後國加佐郡ニ生ル父ハ増山守正母ハたけ子高田氏ニシテ著者ノ姓名ハ其母ノ祖父今ヨリ滿百一年前醫業ヲ始メシ者ヨリ繼承セルナリ

著者ハ幼ニシテ其父及古川近藤等ヨリ漢學ヲ學ビ明治九年京都醫學豫備校ニ入リテ獨逸學及拉典文法ヲレーマンニ數學ヲ山田ニ漢學ヲ林ニ學ビ明治十二年業ヲ卒ヘテ京都醫學校ニ入リ理化學ヲワグネルニ解剖學ヲ萩原ニ組織學其實習及生理學ヲシヨイベニ學ビテ優等成績ヲ以テ前期醫學科ヲ卒リ次テ理學的診法殊ニ其實習ヲシヨイベニ學ビ其他病理學ヲ新宮ニ藥物學ヲ渡ニ內科學婦人產科學及衛生學ヲ齋藤ニ外科學及法醫學ヲ猪子ニ眼科學ヲ淺山ニ學ビ優等ヲ以テ明治

十七年京都醫學學校ヲ卒業シタリ右修學中京都療病院典籍掛次ヲ京都醫學校書籍器械掛ヲ擔任シ又其施療病室ニ當直シタリ同年東京豫備門分鑿全科試驗ヲ受ケテ及第シ直チニ東京大學醫學部ニ入り博物學ヲ松原ニ、物理學ヲ村岡ニ、無機化學ヲエーキマンニ、有機化學及分拆術ヲ久原ニ、解剖學、組織學及胎生學ヲ小金井ニ、病理解剖學ヲヂッセ及三浦ニ、藥物學ヲ高橋ニ、生理學ヲ大澤ニ、內科學及理學的診法ヲベルツ、佐々木及青山ニ、外科學及皮膚病微毒學ヲスクリバ、佐藤及宇野ニ、產科學及婦人科學ヲ濱田及ベルツニ、眼科學ヲ河本及甲野ニ、小兒科學ヲ弘田ニ、法醫學ヲ片山ニ、衛生學ヲ緒方ニ、精神病學ヲ榊ニ、學ビ明治二十二年優等成績ヲ以テ醫科大學ヲ卒業シタリハ

明治二十三年ヨリ醫科大學附屬醫院內科醫局ニ入り主モニベルツノ助手トシテ且ツ勤メ且ツ學ベリ明治二十七年青山及石神ガ香港ニ於

テ、ペスト病ニ犯サル、ヤ選バレテ東京醫學會、東京學士會及國家醫學會ヲ代表スル慰問使トシテ香港ニ到リ次テ兩者ト共ニ無事歸朝セリ明治二十九年醫科大學助手ヲ辭シテ東京ニ東洋內科醫院ヲ創立シ之ニ長トシテ今日ニ至ル又明治三十二年更ニ相州茅ヶ崎海濱ニ南湖院ヲ設置シ之ニ長トシテ今日ニ至ル其他曾テ醫科大學醫院ニ看病學講師タリシコト助手解職前二ケ年其後更ニ一ケ年ナリシガ明治三十年以來私立看病學講習所ヲ病院內ニ開キ之ニ長トシテ今日ニ至ル又明治二十六年ヨリ同三十六年迄濟生學舍理學的診法實習講師タリ而シテ同三十一年ヨリ三十六年迄同校外臨床講義講師ヲ兼テタリ

著者ハ曾テ腸窒扶斯、赤痢及痘瘡ニ關シ實驗セシ所ヲ報告シタリ其他數多ノ醫學的報告、中理學的診法ニ關スル者大部分ヲ占ム而シテ其後ノ研究ニ基ツキ更ニ新報告ヲ出スノ準備ヲ有セリ就中其近時發表シ

タルハ叩音ノ明幽ト長短ニ就テ及兩健肺叩音ノ差別ナリ

明治四十年七月

相州茅ヶ崎ニ於テ

著者識

四

大澤博士ト著者トノ關係

- (其一) 著者ノ醫科大學學生タリシトキ同博士ハ其生理學教授ナリキ
- (其二) 著者ノ醫科大學學生時代及其卒業時同博士ハ其教頭ナリキ
- (其三) 著者ノ醫科大學ニ助手及看病學講師タリシトキ同博士ハ其學長ナリキ
- (其四) 同博士ハ著者ト同僚ナリシ所ノ笠原博士ノ近親ナリ
- (其五) 笠原博士ノ京都醫科大學ニ赴任スルヤ著者ヲ醫トシテ同博士ニ推薦シタリ
- (其六) 爾來同博士ノ家庭ニ內科的疾病アル毎ニ其診療ヲ依托セラレ著者モ亦至誠ヲ以テ其信任ニ報イタリ
- (其七) 先年其賢息鐘一君將ニ醫科大學ヲ卒業セントシテ劇症インフ

ルエンガ及腎臟炎ニ犯サレシニ因リ著者全力ヲ其治療ニ傾注スル
モ効顯ナカリシ際ト雖モ同博士ハ毫モ著者ノ醫能ニ疑惑ヲ生ズル
所ナカリキ而シテ笠原青山及三浦ノ三博士ガ診療ヲ共ニ爲シタルハ
著者ノ懇請ニ基ケルナリ

(其八) 同博士ハ酒害防禦論及冷水浴獎勵說ニ於テ著者ト同主義ナリ

(其九) 同博士ハ會テ豆腐ノ分拆的消化試驗ヲ行フテ著者ノ熱心主張
セル豆腐食用普及說ニ有力ナル論據ヲ與ヘタリ

(其十) 同博士ハ著者ガ千萬人ト共ニ敬愛スル高德ノ學者ナリ

口腔聽診法 Orisuscultation 又 Oraluscultation

高田 畊 安 述

定義 口腔聽診法トハ胸内ニ發生スル雜音殊ニ水泡音ヲ開ケル口腔
ヲ通シテ聽診スルヲ謂フ

歴史 喘息患者等ニ發スル喘鳴呼吸ノ他ニ頻死者ニ發スル氣管水泡
音 Tracheal Rassel の能ク數尺ヲ距テ、聽診セラル、ハ古來人ノ熟知セ
ル所ナリ而シテ一千七百十九年聽診法ノ發明者ラエンチックハ彼ノ水
泡音即チ「ラッセル」音ノ語ヲ胸面ニ耳或ハ聽診器ヲ附接シテ聽取ス可キ
水泡音ニ應用ナシタリシガ一千九百七年ノ今日ニ至リ余ハ其ラエン
チックノ水泡音ヲ患者ノ胸面ニ接觸スル「ナクシテ其哆開セル口腔
ヲ通シテ聽診シ得可キ」トヲ發見シタリ

方法 受診人ハ開口シテ「ハ」音ヲ發ス可キ形態ヲ口腔ニ取ラシ
メ而シテ之ヲ通シテ可及的靜カニ且ツ深ク呼吸スルニ際シテ發現シ
タル雜音殊ニ水泡音ヲ檢者ハ其附近ニ在リテ聽診スルナリ
受診人ノ體位ハ隨意ニテ可ナレドモ仰臥位ヲ最良トス就中強鳴性強
鳴トハ Resonanz ノ謂ニシテ Consonanz ノ共鳴ニ對シテ斯ク譯別シタル
ハ飯盛ニ倣ヒシナリニ富メル床上ニ仰臥スルヲ貴ブ是殊ニ自身胸内
ヲ本法ニ依リテ聽診スル場合ニ稱用ス
開口ハ中等大ナルヲ常トスサレドモ最大開口ヲ行ヒ同時ニ舌ヲ挺出
セシムレハ最モ明カニ聽クヲ得ベシ呼吸ハ最モ深長ナルヲ良トス併
聲門性及口腔性雜音ヲ伴フコト無キ様戒メザル可ラズ其際受診人ヲ
シテ呼氣セル乎將タ吸氣セル乎ヲ他人ニ覺知セシメザル程ニ靜徐ニ
呼吸セシメ而シテ其呼吸兩時ヲ檢者ガ鑑別スルニハ其聽診器ヲ把持

セル手指ニ感スル呼氣ノ溫暖ヲ利用スルナリ又深呼吸ノ間ニ一二度
咳嗽セシメテ聽診スレハ其檢定ノ効果更ニ精確ナリ
聽診器ハ或ハ之ヲ用ヒズ或ハ之ヲ用フ其之ヲ用フル場合ニハ雙耳護
謨管聽診器ノ小胸端ヲ口前ニ保持シテ之ヲ行フヲ最良トス但肺結核
患者ヲ咳嗽セシムル際ハ聽診器ヲ少シク側方ニ轉ジテ以テ飛痰ヲ避
クルヲ要ス抑聽診器ハ之ヲ清潔ニ保ツヲ怠ル可ラズ
周圍ノ空氣ハ溫暖清潔ニシテ含濕セルヲ良トス併其他ノ場合ニモ呼
吸極メテ緩徐ナレバ本法ヲ行フヲ得ベシ附近ハ靜肅ナルヲ貴ブ閉鎖
セル室内ニ於テ聽診殊ニ明瞭ナリ
受診人若シ專ラ口腔ヲ通シテ呼吸シ能ハザルトキハ其兩鼻翼ヲ壓迫
シテ鼻孔ヲ閉鎖シ以テ之ヲ助クルモ可ナリ此事ハ殊ニ小兒ニ必要ナ
ルコトアリ

本法ハ或ハ單獨ニ之ヲ行ヒ或ハ胸面聽診法即チラエンチック聽診法ニ兼ネテ之ヲ行フ而シテ其兼チ行フ場合ニハ乙法ノ直前ニ之ヲ行フヲ正順トス蓋斯ノ如クシテ先ヅ氣管支及肺臟内ニ水泡音ノ存否ヲ判定シ其存在セル場合ニハ更ニ其多少發時乾濕及大小ヲ檢定ス而シテ之ニ次テ胸面聽診法ヲ行フテ以テ水泡音ノ發生部位ヲ決定スルナリ其他同時ニ胸面水泡音ノ多少發時大小乾濕及響否ヲ檢定スルコト從前ノ如クナル可シ而シテ兩種聽診法ノ水泡音ヲ簡便ニ呼ビ又記シ分ケン爲ニハ口腔水泡音ヲロラ(口腔囉音ノ略)又ハMR (Mund-Rasselnノ略)ト稱シ胸面水泡音ヲ胸ラ(胸面囉音ノ略)又ハBR (Brust-Rasselnノ略)ト記シ其他胸内ヨリ來ラズシテ口腔内ノ舌上ニ生ジタル水泡音ヲ舌ラ(舌上囉音ノ略)又ハZR (Zungen-Rasselnノ略)ト稱ヘ又軟口蓋ト咽頭後壁ノ間ニ發シタルヲ咽ラ(咽頭囉音ノ略)又ハRR (Rachen-Rasselnノ略)ト呼ブ

ヲ可トス

鑑別 口腔聽診法ニ在テ水泡音ヲ聽ク時モ聽カザルトキモ決シテ輕シク斷定セザルヲ良トス蓋一方ニハ舌上水泡音及咽頭水泡音ナル者アリテ胸内水泡音ト誤認セシムルコトアリ他方ニハ胸内水泡音ノ存在セルニ拘ラス口腔聽診法執行上ニ缺點アリテ之ヲ聽漏ラスコトアレバナリ

(第一) 口腔聽診法ニ在テ水泡音ヲ聽クトキハ毎回其口内舌上性ナル乎咽頭性ナル乎將タ胸内性ナル乎ヲ鑑別セザル可ラズ而シテ就中其舌ラトロラノ鑑別法ハ持續性開口ヲ以テ極メテ靜カニ深呼吸ヲ行ハシムルナリ其他同位置ニ在テ一兩度咳嗽セシメツ、聽診スレバ舌上性水泡音ハ消失スルニ拘ラス胸内性水泡音ハ消失セザルノミナラス却テ顯著トナルコト多シ其他舌上音ハ多ク開口ノ始メニ發シ且ツ完

全ナル水泡ヲ形成スルコト罕ナリ蓋同音ハ唾液上ノ氣流ノ爲ニ生ジ
タル水泡ニ基クコト罕ニシテ大抵粘着セル粘膜面ノ相離開スル際ニ
發スル者ナレバナリ又舌上音ハ開口ヲ極メテ大ニシ舌ヲ前方ニ充分
ニ挺出セシメ鼻孔ヲ閉鎖シ深呼吸ヲ反覆セシムルコト等ニ依リテ消
失スルヲ多シトス又咽ラト口ヲノ鑑別法ハ軟口蓋及咽頭ヲ視診シツ
、聽診器小胸端ヲ極メテ哆開セル口腔前ニ持シテ聽診スルナリ其際
咽ラニ在テハ軟口蓋ガ咽頭壁ヲ離ル、ノ際之ニ一致シテ發音スルヲ
認取ス可キモ口ヲニ在テハ其發音軟口蓋ノ運動ニ一致セズ
(第二) 口腔聽診法ニ在テ胸内水泡音ハ決シテ毎回容易ク聽取シ得可
キ者ニ非ズシテ屢受診人ニ對シテ左ノ言ヲ發スルヲ要スルコトアリ
即チ口ヲ今一層大キク開イテ呼吸ヲ極ク靜カニ極ク長クナサイ又咳
キヲ今一ツシテ下サイ是等ヲ反覆シツ、細心注意シテ初メテ胸内水

泡音ヲ認識シ得ルコトアルナリ是殊ニ周圍ノ閉鎖セズ附近ニ騷雜ナ
ル發音アルトキニ然リトス故ニ最初ノ不完全ナル口腔聽診ニハ水泡
音ヲ發見セズシテ却テ其次ニ行フタル胸面聽診ノ際ニ水泡音ヲ發見
シタルガ故ニ再ビ口腔聽診法ヲ行フテ之ヲ確定スルコトアルナリ
(附言) 喉頭及氣管幹ニ水泡音ヲ發スルコトハ極メテ罕ナリ是其部ハ
氣道中格別廣濶ナルニ因ル頻死時ノ氣管水泡音ハ大抵氣管支水泡音
ニシテ其際鬱血性加答兒等ノ爲ニ多數ノ水泡音ヲ發生シ同時ニ下顎
下垂シテ口腔哆開セルガ故ニ能ク遠隔部ヨリ聽取セラル、ナリ
所見 口腔聽診上ノ所見ヲ舉グレハ
(一) 被檢人ニ觸接セズシテ其胸内水泡音ヲ明瞭ニ聽取ス其能聽距離ハ
一定セス聲門ノ開大口腔ノ開大附近ノ靜肅居室ノ閉鎖臥床ノ強鳴等
ハ同距離ヲ延長スル所ノ者ナリ予ハ右ノ條件不完全ナル場合ニ於テ

スラ尙ホ約四メートルノ距離ニ受診人ト對立シテ其呼吸兩時各六個ノ水泡音ヲ發スルヲ算シ得タリキ又外耳ト口角間ノ距離ハ拾山米以上ニシテ而シテ外聽道ハ管ニ口腔ノ正面ニ在ラザルノミナラズ其後方ノ側面ニ位セルニ拘ラズ床上仰臥時毎回自ラ能ク明カニ胸内水泡音ヲ聽取スルコトヲ得然レドモ若シ健側臥ノ位置ニ轉シテ以テ胸發音面ヲ強鳴臺ヨリ遠ザグレハ同音ノ減少又ハ消失スルコト多シ

(二) 口腔水泡音ハ毎回有響性ナリ

(三) 口腔水泡音ハ毎回多少増大セリ故ニ捻髮音ヲ存セス

(四) 口腔水泡音ハ概テ濕性ナリ胸面ノ粗烈音及吹笛音ハ口前ニハ毎回濕性水泡音ヲ呈ス啞軋音モ亦大抵濕性水泡音ヲ呈スレドモ蜂鳴音ハ大抵乾性ニ止マリ類鼾音ハ通常乾性ナリ但シ乾性音モ亦著シク響性ヲ帶ベリ捻髮音ハ増大シテ有響性ナルビチビチ音ヲ呈スレドモ完全

ナル水泡ヲ形成スルニ至ラズ其他濕性ナル胸面水泡音ニシテ口腔ニハ啞軋音ニ似タル且ツ甚タ大ナル水泡音ヲ呈スルコトアリ

(五) 口腔水泡音ハ同人ノ胸面水泡音ニ比較シテ吸氣時並ニ呼氣時其總數相等シキヲ常トス例之ハ兩肺尖ニ吸氣時各二個ノ水泡音ヲ發スル場合ニハ口腔ニハ同時ニ其四個ヲ呈ス然レドモ又口腔水泡音ハ胸面水泡音ニ比シテ屢多數ナリ是其原因ハ概テ呼吸ノ長短ニ在リ即チ口腔聽診法ニ在テハ胸面聽診法ニ於ケルヨリモ呼吸ヲ延長セシムルニ因ルナリ併又時トシテ胸内水泡音ニシテ胸面ニ達セザル者アルニ因ルヲアリ其他口腔水泡音ノ胸面水泡音ノ總數ニ比シテ少數ナルコトナキニ非ラズ是胸内水泡音甚ダ多數ニシテ一瞬間ニ二三個偶發スルニ因ルナリ予ハ曾テ一吸氣時ニ口腔水泡音拾六個ヲ算シタルコトアリ又約五拾個ニ達スル者モアリキ斯クノ如キ多數ノ水泡音ヲ計算ス

ルニハ呼吸ヲ極メテ緩徐ナラシメ且ツ延長セシムルヲ要スサレドモ
斯ク多數ナルコトハ罕ニシテ大抵拾個以内ナリ而シテ各所胸面水泡
音ノ半呼吸時四個ヲ超ユルハ罕ナルニ拘ラス口前水泡音ノ六個ニ達
スル者ハ屢々實見スル所ナリ

(六) 胸面水泡音ハ呼吸時ニ吸氣時ヨリ多數ナルコトハ極メテ罕ナレト
モ口腔水泡音ニ在テハ屢々其事アリ蓋氣流ト傳音ノ方向ニ基因スルナ
リ而シテ口腔水泡音ヲ精査スレハ呼吸兩時同數ナル者最モ多キガ如
シ

(七) 喀血、肺浸潤、肺硬化、肋膜炎等ニ在ツテ胸面聽診上ニハ水泡音ヲ發見
シ得ザル場合ニモ本法ヲ用ヒテ明カニ之ヲ聽取スルコト多シ

(八) 心音ハ其不純ナル者ヲ聽取スルコトアリ是殊ニ左肺下部ノ萎縮ノ際
ニ多シ其他ノ場合ニ例之ハ健者ニモ亦之ヲ聽クコト罕ナラズ

(九) 肋膜炎摩擦音ハ通常之ヲ聽カズ

物理 口腔聽診法ノ物理ヲ説明センニ抑固體ニ包容セラレタル氣體
ハ尤モ強鳴性ニ富メリ故ニ樹木狀ナル氣道ノ合氣ハ其枝葉ニ相當ス
ル氣管支及肺胞又ハ肺空洞内ノ水泡音ニ對シテ強鳴シ其佇立性音波
ハ樹幹タル氣管、喉頭及咽頭ヲ經由シテ鼻腔又ハ口腔ニ傳達ス而シテ
就中鼻腔ハ比較的狹隘ニシテ強鳴スルコト少ナキハ大聲ノ鼻腔ヨリ
出デザルニ照シテ明カナリ故ニ本法ハ專ラ開大セル口腔ヲ用ヒテ其
強鳴ノ効ヲ著明ナラシムルナリ

口腔聽診法ヲ以テ聽ク所ノ水泡音ノ胸面水泡音ニ比シテ増大シ且ツ
響性ヲ呈スル所以ハ上記ノ如ク其音口腔氣柱ノ強鳴音ナルニ在ルナ
リ其他胸内深部ノ水泡音が毫モ減弱セザルノミナラズ能ク更ニ遠隔
部位ヨリ聽取セラル、モ亦之ニ因ルモノトス因ニ曰ク胸面水泡音ト

雖モ其大小常定セルニ非ズシテ聽診器内氣柱ノ最大横徑殊ニ胸端ノ大小ニ從ツテ變化セリ蓋同器ヲ以テ聽ク所ハ原水泡音ニ非ズシテ同氣柱ノ強鳴音ニ過ギザレバナリ

呼吸時聲門性雜音ヲ避ケシムルコトハ二種ノ利アリ即チ其一ハ目的物タル水泡音ガ喉頭氣管支音ノ爲ニ妨害セラレザル事ニシテ其二ハ雜音ヲ避ケン爲ニ聲門不隨意ニ開大シテ水泡音ヲ通過シ易カラシムル事ナリ

舌ヲ挺出スレハ水泡音明朗ト成ルハ喉頭入口擴ガリ且ツ氣道ノ屈折ヲ減ズルニ因ルナリ

鼻孔ヲ閉鎖シテ聽音明瞭トナルコトアルハ呼氣及音響ノ之ヨリ漏ルヲ防グニ因ルナリ

咳嗽ニ依リテ舌上水泡音ノ消失スルハ強呼氣ノ爲ニ舌上唾液ノ吹キ

去ラル・ニ因ルナリ

本法ノ床上仰臥位ヲ貴ブ所以ハ深呼吸ニ因スル眩暈ヲ豫防スルノ他ニ臥床ノ強鳴性ヲ利用スルニ在リ

聽診器ノ小胸端ヲ使用スル所以ハ水泡音ニ對シテハ胸端ノ大小ニ因スル音響強弱ノ差別少ナキト咳嗽時鼓膜ノ打撃輕キニ在リ

胸内水泡音ガ開ケル口腔ヨリハ能ク遠距離ニ達スルニ拘ラス胸面ニハ外耳又ハ聽診器ヲ氣密ニ接着セシムルニ非ザレバ聽診スルヲ得ズ且ツ其聽診スル所モ往々胸内音及口腔音ノ一部分ニ過ギザルハ傳音ニ對シテ肺臟及胸壁ノ妨碍アルニ因ルナリ就中肺組織ニハ緊張セル軟膜ト氣體ト反覆相重疊セルガ故ニ音波ハ頻回反射及屈折ヲ受ケ之ガ爲ニ減削セラレザルヲ得ズ而シテ浸潤又ハ空洞ノ爲ニ肺組織中ノ氣體又ハ固體ヲ削除セル場合ニ傳音初メテ佳良トナリ胸面水泡音モ

亦強盛且ツ有響ニシテ往々遠隔シテ聴取セラル併其到達距離ハ遙ニ
口腔水泡音ニ及バズ是胸面ニ向ツテハ氣柱ノ開孔セルナキニ因ルナ
リ又胸壁軟部ノ吸音性音響ヲ吸收スル性質ヲ謂フノ爲ニ胸面水泡音
ハ減弱セルコトハ同音ノ通常厚壁ナル背面ニ弱キト麻瘦者ニ強盛ナ
ルトニ照シテ明カナリ
胸面ニ對スル傳音上ノ障礙ハ斯ク如ク大ナレドモラエンチック聴診
法ニ際シ殊ニ聴診器ノ大胸端ヲ用フル際其水泡音ノ屢、口腔聴診法ニ
於ケルヨリモ明朗ナル所以ハ聴診器内氣柱ノ強鳴音が遺漏ナク鼓膜
ニ波及スルニ在リ其他其際發音點ニ對スル距離ノ大小ハ若干ノ影響
ナキニ非ズ
應用 本法ハ主トシテ通常氣管支及肺臟内ニ發現スル水泡音ノ存否
及多少ヲ檢定スルニ適シ同時ニ其發時乾濕及大小ヲ鑑識ス故ニ氣管

支加管兒肺炎肺水腫肺出血等ノ查察時毎回應用セララル可キ者ナリ而
シテ肺結核ノ診斷上極メテ緊要ノ一方法ナリ
今本法應用ノ目的及機會ヲ列舉スレバ左ノ如シ
(一)自聽法 *Autoauscultation* トシテ自身ノ胸内ヲ自檢ス是素人ニモ行ヒ
得可キ診法ニシテ宜シク普通養生法中ノ一項ト爲シ既ニ高等小學末
年ノ生徒ニ略ボ左ノ如ク教訓ス可キナリ
時々殊ニ胸痛惡寒倦怠衰弱等自身ニ異常ヲ認ムルコトアレバ夜間
蓐上ニ仰臥セルニ際シテ「ハーハー」音ヲ發ス可キ口形ヲ以テ靜カニ
シテ長キ呼吸ヲ數回行フ可シ其際若シ水ノ沸クトキ氣泡ノ沸然タ
ルガ如ク水泡音即チ「ブツブツ」音ヲ確カニ聽クコトアレハ翌日醫診
ヲ受ケテ肺病ノ有無ヲ明カニ爲スヲ良トス若シ同音ヲ聽クコトナ
ケレハ未ダ肺病ヲ發シアラザルコト既ニ略ボ明カナリ(蓋同病ノ初

期ハ大抵局限性氣管支肺炎ニシテ其肺臟ノ上端ニ位セルト(即チ肺尖加答兒)下部ニ在ルト(即チベルツ氏肋膜肺炎)ニ拘ラズ水泡音ヲ發現スレバナリ

醫師ハ又屢診査スルヲ得ザル患者ニ上記自聽法ヲ教ユルト同時ニ其水泡音ノ増加ハ大抵同病増進ノ前徴ナレバ其際療養方法ヲ一層嚴正ニ守リ或ハ更ニ醫診ヲ受ク可キヲ附言ス可シ

(二) 示聽法 Demonstrierende Auscultation トシテ患者其所患ヲ其主長又ハ監督ニ示シ以テ其請暇休養ノ必要アルヲ證明スルニ適ス

(三) 便聽法 Bequeme Auscultation トシテ服裝ノ儘體裁ヲ損ズルナクシテ聽診ス故ニ公會汽車、電車、街路等ニ在リ殊ニ寒冷ノ氣中ニシテ服裝ノ複雜ナルニ際シテ傍人其喀痰ニ血線ヲ認ムルトキ舊知ノ肺患者ニ邂逅シテ其健否ヲ知ラント欲スルトキ同伴者咳嗽、胸痛等ヲ發シテ肺炎ノ

疑アルトキ等ニ對シテ本法ハ唯一ノ胸内診査方法ナリ(其際可及的靜時及靜所ヲ選ビテ之ヲ行フ可キハ勿論ナリ)本法ハ聽診器ヲ必要トセズ又近接ヲ要セズ單ニ無音談話ノ態度ヲ以テ聽診ヲ了スルガ故ニ嚴然タル公衆ノ面前ニ在リテモ之ヲ行フニ妨ゲナシ

(四) 安聽法 Ruhige Auscultation トシテ咯血患者ニシテ脫衣轉臥又ハ咳嗽ノ爲ニ増劇或ハ再發ノ虞アルトキ又胸部知覺過敏ニシテ咳嗽ノ爲ニ發痛ス可キトキ本法最モ適應セリ蓋本法ニ在テハ概テ咳嗽ノ必要ナケレバナリ

(五) 明聽法 Klare Auscultation トシテ從來ノ胸面聽診法ニテハ發見シ得可ラザル水泡音ヲ本法ニ依リテ鑑識ス例之ハ肋膜炎ニシテ間質性肺炎及氣管支肺炎ヲ伴發セルニ拘ラズ其滲出液ノ多量、胸壁ノ厚肥、摩擦音ノ強盛等ノ爲ニ妨ゲラレテ胸面水泡音ヲ呈セザルガ爲ニベルツ氏肋膜

肺炎ナル名稱ヲ受ケザリシ者ノ甚ダ多キヲ本法ニヨリテ發見ス可シ
又中心性肺炎ナル者アリテ胸面ヨリハ鑑識スルヲ得ザリシコトハ既
ニ人ノ知ル所ナルガ本法ヲ用ヒテ盡ク其水泡音ヲ發見スルナリ

(六)速聽法 *Schnelle Auscultation* トシテ多人數ノ體格検査ヲ短時日ニ行フ
ヲ要スルトキ及多數ノ諸種患者中ニ胸内加答兒ノ有無ヲ短時限内ニ
診査セザル可ラザル場合ニハ專ラ本法ニ依ラザル可ラズ蓋其際兩肺
表面各部ヲ精檢スルノ暇アル可ラザレバナリ

(七)豫聽法 *Vorbereitende Auscultation* トシテ胸面聽診法ノ直前ニ行フテ胸
内水泡音ノ存否及其總數ヲ豫測ス蓋本法ヲ正シク行フニ拘ラズ水泡
音ヲ發見セザルトキハ胸面聽診上ニモ之ヲ聽カザルヲ常トスルガ故
ニ乙法ノ一部若クハ全部ヲ省略スルヲ得可シ又其際若干ノ口腔水泡
音ヲ發見スルトキハ胸面聽診ノ主要ノ任務ハ其際發生部位ヲ檢定ス

ルニ止マレリ而シテ胸面水泡音ノ總數ト口腔水泡音ノ數互ニ相一致
スルニ至レバ既ニ胸面聽診ノ完結シタルヲ知ルナリ

(八)對聽法 *Controllierende Auscultation* トシテ胸面水泡音ヲ他方面ヨリ聽診
スルコトニヨリテ其所見ヲ對照シ確斷ス蓋胸面聽診ニハ只時々幽微
ノ水泡音ヲ認ムルニ止マリ或ハ輕微ノ粗烈音吹笛音啞軋音等ニ止マ
レルトキ本法ヲ以テ檢スレバ大抵明カニ濕性水泡音ヲ發呈ス又肋膜
摩擦音ニ混同セルガ故ニ胸面ニハ判明セザル水泡音ヲ本法ハ最モ能
ク之ヲ區別ス蓋其際摩擦音ハ口前ニ達セザレバナリ(其他第五項參照)
結論 口腔聽診法ハ肺結核ノ診斷上及治療上大効能ヲ有スル者ナル
コトハ既ニ應用ノ諸項下ニ明カナリ而シテ今之ヲ大別スレハ左ノ如
シ

(第一) 肺結核ノ早期診斷法ヲ最モ早期ニ行ハレシム(第一項及第五項)

- (第二) 肺結核ノ早期診斷法ヲ最モ普ク世間ニ行ハレシム(第一項)
- (第三) 肺結核ノ早期診斷法ヲ最モ容易ク行ハレシム(第一項第三項乃至第七項)
- (第四) 肺結核ノ診斷ヲ明確ニスル所アリ(第七項及第八項)
- (第五) 肺結核患者ニ療養上ノ便宜ヲ與フ(第一項及第二項)

明治四十二年十二月二十日印刷
 明治四十二年十二月二十八日發行

正價金貳拾錢

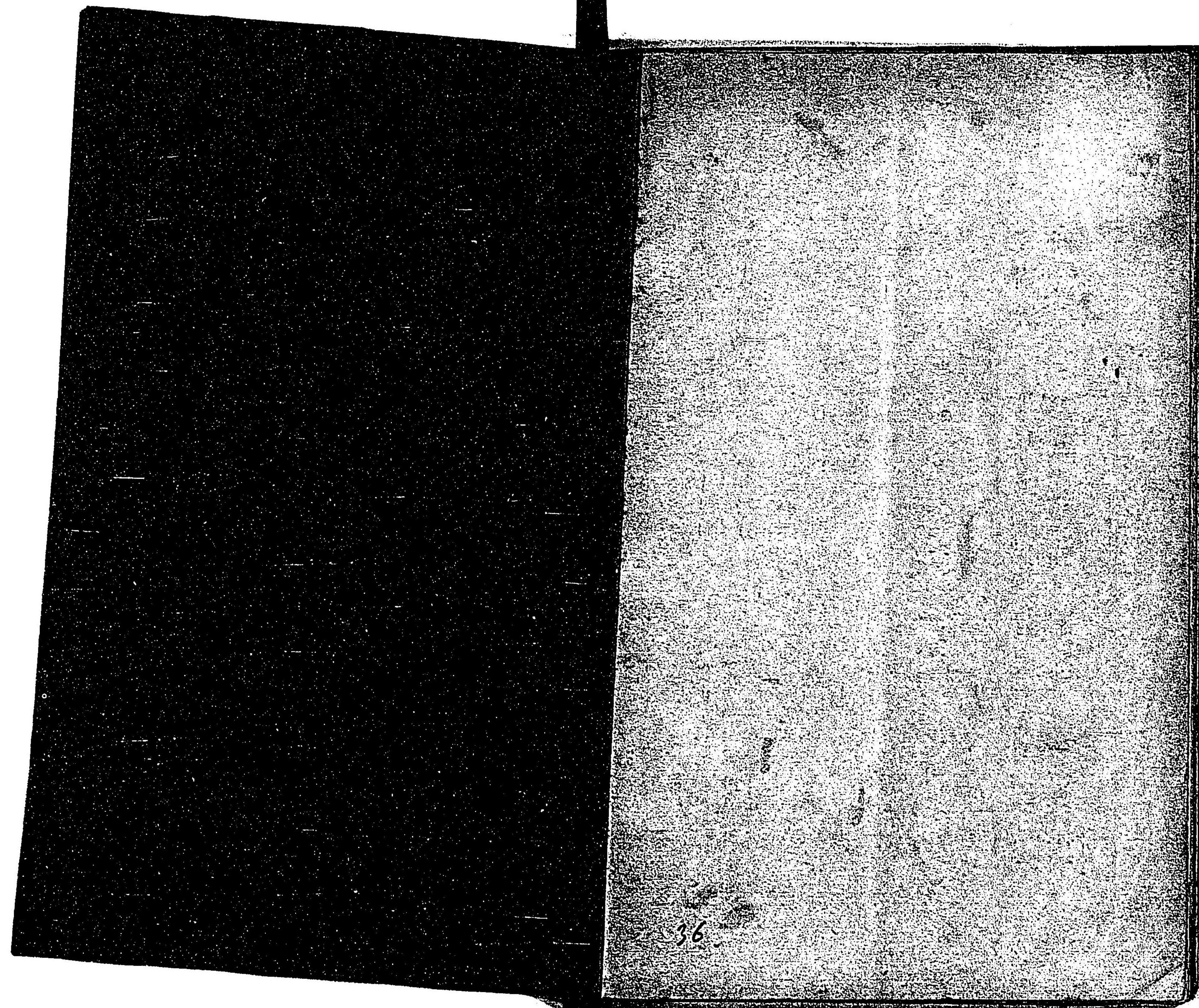
著作發行者 兼
 東京市神田區三崎町一番地
 高田 明 安

印刷者
 東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地
 矢部 政 吉

印刷所
 右・同所
 正文 舍
 (電話下谷二三六〇番)

賣捌所
 東京市本郷區湯島切通坂町
 八(電話下谷二三三〇番)
 東京市本郷區神水町三丁目
 卅二番地(電話下谷五七番)
 南江堂書店
 南江堂支店

52
 130



52
30

1000

52

30

058601-000-1

52-30

口腔聴診法

高田 畊安 / 著

M42

CBC-0123

